14　いくつになっても生き生きと（高齢者）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、ゴリけんがお届けします。

「人生１００年時代」といわれる中、いくつになっても生き生きとした生活を送りたいものです。今日は、高齢者施設や保育園などで紙芝居のボランティア活動に励む「ルルル・紙芝居の会」の代表者、小畑敏助さん、８６歳を紹介します。

小畑さんは７５歳まで働いていましたが、その後も「家でじっとしているより、何か社会の役に立って喜んでもらえるようなことをしたい」と、シニアフレンズ福岡ボランティア協議会が企画した「紙芝居講座」を受けました。

講座が終了すると、受講生に呼びかけ、平成２５年に１０人で「ルルル・紙芝居の会」を設立しました。現在、会員は１５人、最高齢者は８７歳です。多い時は、月に２０日以上も保育園や高齢者施設などを訪問していました。

小畑さんは言います。

【小畑さん役】紙芝居で大切なのは、作品の世界を深くつかみ、それをどう伝えるかです。

観客は、絵だけを見るのでもなく、声だけを聞くのでもあ

りません。演じ手の存在そのものを受け止めながら、紙芝居を楽しみます。そのため、演じ手はとにかく作品を読み込まなければなりません。

ある高齢者施設を訪問した時のことです。目の不自由な女性が、じっと聞き入っている姿を目にしました。演じ終わると、その方が近寄ってきて、「紙芝居は心で読むんですね」と言ってくれたんです。絵は見えていないけれど、作品の世界を感じてくれている、ちゃんと伝わっている…。そう思うとこみ上げてくるものがありましたね。日頃から自己満足で終わらないようにと、会員みんなで一生懸命、研鑽を重ねてきてよかったと、心の底から思いました。

保育園では、よちよち歩きの幼い子も、本当に真剣に見て聞いてくれるんです。

紙芝居を通して、お互いの気持ちが一つになり、共感の世界が生まれる。最高の喜びですね。

「また来てね！」と笑顔の子どもたちに見送られて保育園を後にするとき、明日へのエネルギーが湧いてきます。今は、早くコロナが収束することを願い、自宅で練習に励んでいます。